The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治期に朝鮮半島で販売されていた日本陶磁器について
Author(s)	前﨑, 信也
Citation	デザイン理論. 2014, 63, p. 110-111
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56318
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治期に朝鮮半島で販売されていた日本陶磁器について

前﨑信也／立命館大学

はじめに

明治期における日本陶磁器の輸出については，万国博覧会研究，日本陶磁史，美術史，産業史，経済史といった様々な分野で研究が進められてきた。明治政府は陶磁器を中心とする窯業を外貨獲得のための重要分野であるとして，海外伝習生の派遣や西洋式石炭窯の導入など，積極的な窯業振興策を導入した。結果として，北米・ヨーロッパで盛んに開催された万国博覧会において多くの賞を受賞。19世紀末から20世紀初頭にかけては，西洋の流行に即して，アール・ヌーボーなどから影響をうけたデザインを採用した製品などが生産された。しかしながら，これまでの西洋化・近代化に傾注した研究によって，近代における海外向け日本陶磁器は，その大半が西洋向けであったかのように捉えられてきたという側面があることもまた事実である。

『デザイン理論』掲載の拙稿「明治期における清国向け日本陶磁器」では，明治期中頃以降，日本陶磁器の輸出先として西洋諸国と同様に重要な位置を占めながら，これまであまり注目をされてこなかった清国向けの日本陶磁器について論じた。清国同様に，朝鮮半島も日本の陶業者にとって主要な輸出先だったが，これについても既存の研究ではほとんど触れられることはなかった。

本発表ではこのような背景をふまえて，明治期後半における朝鮮半島向け日本陶磁器について文献資料を中心に検討を行った。

朝鮮半島向け陶磁器輸出の開始

明治期，日本はアジアにおける主要陶磁器産国になった。しかし，その要因は日本陶磁器業の発展だけではなかった。それ以前に，太平天国の乱（1850-64）で江西省が戦乱に巻き込まれたことによる景徳鎮の磁器生産の減退があった。つまり，中国の磁器生産が衰退した結果，明治中期以降から戦前期にかけて，日本陶磁器は中国北部地方，及び朝鮮半島市場を席巻したのである。

明治９（1876）年の日朝修好条規が締結され，公式に李氏朝鮮と日本の貿易が開始された。釜山港を皮切りに1899年までに，元山，仁川，木浦，群山，馬山が開港した。既に明治20（1887）年には，元山港において日本陶磁器の販売が多額に及んでいるという報告があるように，条約締結直後から日本の陶器販売業者は朝鮮半島市場に進出し，徐々に販路を拡大していった。

清国市場と朝鮮半島市場の違い

清国市場は日本陶磁器業者にとって重要な輸出先であったことに間違いはないが，その規模とは裏腹に大きな利益生む市場ではなかった。対清貿易においては，日本人売込商が，神戸を中心とする貿易港の清商へ製品を出荷することがほとんどである。その先にある清国国内での販売については，清商の手に委ねられ，日本の陶業者，及び貿易商にとって有望な市場とは言えなかったのである。

一方，朝鮮半島市場は開港直後から日本の陶磁器販売業者が販路を拡大に成功した。1880年代後半から，朝鮮半島向けの貿易額は着実な伸びを見せ，1900年代前半には，日本の陶磁器輸出額全体の一割を朝鮮半島向けが

占めるまでとなったのである。

朝鮮半島向けの日本陶磁器

朝鮮半島向けの日本陶磁器は，茶碗・皿・丼・土瓶といった日用品が中心である。品質は中等品への需要が大きく，下等品と上等品のみ需要があるとされた清国市場とは異なる性格を有していた。

朝鮮半島に最初に進出をしたのは瀬戸・美濃の磁器である。しかしながら，同地の磁器は急激な温度変化で破損しやすいという問題があり，特に寒冷地での冬季の使用には不向きであった。そこで，現地業者の要請により1890年代になり，質実堅牢な有田磁器の扱いが始まった。京都や九谷の製品も販売はされたものの，規模は小さく，輸出品の大半は瀬戸・美濃・有田の磁器であったとされる。

伝統的に中国と日本では絵付された磁器が好まれたのに対し，朝鮮半島では無地の白磁が最も好まれた。敢えて意匠を施すのであれば，松竹梅，鶴亀，獅子牡丹など，いわゆる吉祥文が良いとされた。他方，朝鮮半島に特有の問題も存在した。特筆すべきは，人物が描かれた磁器は忌避されるという特徴である。農商務省商工局が明治40（1907）年に発行した報告書『輸出品ノ製作上ニ及ホス海外ノ風習』には，その理由が述べられている。陶磁器製品に限らず人物が描かれた調度品を室内に飾ると，夜更けにその人物が幽鬼となって現れ，その家に災いをもたらすという迷信があり，そのために人物の描かれた製品は忌避されるというのである。この記述を証明するかのように，朝鮮半島で生産された陶磁器には人物を表した意匠が極めて少ないことは事実である。

輸入された陶磁器に対しては年間を通して売り上げがあったという訳ではなく，販売は夏期が中心であった。それは，朝鮮半島で食器として伝統的に用いられている真鍮製の器と関係があった。真鍮は夏期になると錆びて独特の臭いを発するために，夏期のみ磁器の器を用いることが一般的だった。日本の磁器が進出するまでは，李朝の白磁や染付磁器がこの需要を満たしていた。しかし，安価で丈夫な日本製品が一旦広がりを見せると，間もなく朝鮮半島の磁器にとってかわっていったようである。

明治後期に京城で販売されていた日本陶磁器

以上に述べたように，日本陶磁器は明治期の中頃から盛んに朝鮮半島の諸港に向けて輸出された。しかしながら，その多くは一般向けの日用品である。そのために現存作品についての報告はこれまで極めて少なく，記録に対する証拠不足という問題があった。

しかし発表者の調査の結果，1890年代から1907年まで，京城の本町通に実在した日本陶磁器専門店で販売されていた一群の日本陶磁器を発見することができた。このコレクションは，1907年に当時の経営者の一人が他界したことにより閉店した店の在庫品である。子孫にあたる現在の所有者によると，貴重な品のみ日本に持ち帰られ，当時のままに保管されていたという。

驚くべきことに，作品の多くは陶工として初の帝室技芸員となった三代清風與平（1851-1914）の作品であった。つまり当時の最高級の美術陶芸作品が明治期の京城で販売されていたのである。また，それらの作品には人物意匠を用いた作品が含まれていないことも確認することができた。

以上の検討の結果，明治期の朝鮮半島向け日本陶磁器の概要，及び清国市場と朝鮮半島市場の差異を明らかにすることができた。